

「三人図」について

寺川 華奈

日本鍼灸研究会

「三人図」とは、兪穴を系統化するために、中国で古くから用いられてきた兪穴分類法の一つで、主に「仰(正)・伏(偃)・側」の三通りの姿勢別に、「部位」と経脈に兪穴を配列する方法である。『隋書』経籍志所載の「黄帝明堂偃人図十二卷」「扁鵲偃側鍼灸図三卷」「偃側人經二卷」、『唐書』経籍志所載の「黄帝十二經明堂偃側人図十二卷」、また我が国の医疾令・第二十四所載の「偃側図一卷」のように、書名に「偃側」を付す書目は、概ねこの「三人図」と関連があると見られる。

『甲乙経』卷之三では、兪穴を十二経脈と頭・背・面・耳前後・頸・肩・胸・腋脇・腹の九種の「部位」に分類した。これに対して同じ『明堂』系兪穴資料である『千金要方』卷第二十九では「仰人明堂図」(頭面・胸・腹、手太陰・手厥陰・手少陰・足太陰・足陽明)、「伏人明堂図」(頭上・耳後・脊中、手少陽・手太陽・足太陽)、「側人明堂図」(耳頸・側脇、足少陽・足厥陰・足少陰)の「三人図」に分類する。ただし体幹の兪穴の所属する「部位」や所属兪穴には若干の変遷がみられる。例えば『甲乙経』では頭部に所属していた神庭穴、本神穴、頭維穴は面部へ、逆に面部にあった和髎穴、耳門穴、聴会穴等は耳頸部へ移行する。また缺盆穴は肩部から耳頸部へ、廉泉穴は頸部から面部へ移行する。注目すべきは兪穴の取穴位置表記は殆ど変わらず、所属部位のみを変えていることである。それら「移行する兪穴」は部位の境界に位置するものが殆どだが、重要なことは兪穴が所属するものとしての「部位」の変化ではなく、部位そのものに対する認識の変化である。

以下、『甲乙経』卷之三を基本に、三人図形式の伝承を大きく分けると、A『千金要方』『西方子明堂灸経』のように正・伏・側を主軸として兪穴所属の「部位」と経脈を配当したもの、B『千金翼方』卷第二十六、『銅人腧穴鍼灸図経』卷中・卷下、『鍼灸資生経』のように、その前半では『千金要方』の三人図の形式を「部位」において一定程度残存させながら、経脈だけはこれと分離して後半に一括したものの、C『医学綱目』卷之八・穴法下のように、Bの形式のうち経脈別部分も「掌臂」と「足」の部位に解体したものの、D『太平聖恵方』卷第九十九のように、仰人図四図、伏人図四図、側人図四図の十二人形に全ての兪穴を配当したもの、の四種となるように思われる。このうち、正統的な三人図というべきものは、Aの『千金要方』であり、これに次ぐものがDの『太平聖恵方』卷第九十九である。これらと比べて、Bの『千金翼方』や『銅人腧穴鍼灸図経』は既にその一部に三人図の痕跡を遺しているに過ぎない。これは楊上善『黄帝内経明堂』(『明堂類成』)や『外台秘要方』卷第三十九に見られるように、唐代以降、十二経脈に全ての兪穴を配当しようとする志向性が強まった結果と見られる。なお、『太平聖恵方』卷第百にも四十五図の人形図が見えるが、これは三人図的形式からは遙かに遠いものと言わざるを得ない。

三人図は、当初、「部位」に基づく兪穴の整理を補強するものであったと見られるが、『甲乙経』卷之三以来の「部位」の持つ意味は、『銅人腧穴鍼灸図経』、『聖濟総録』(1118年)、『十四経發揮』(1341年)と続く十二経脈系兪穴書の登場によって、次第に忘却されていったように思われる。その一方で、「兪穴は経脈上にある」との認識は、兪穴の「部位」による規定という重要な要素を等閑視させていったとも考えられる。